
Pocket Survivor

くすくすマックス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

P o c k e t S u r v i v o r

【Nコード】

N 4 9 2 7 R

【作者名】

くすくすマックス

【あらすじ】

遙か昔、日本で起こった最も大きい戦争、「ポケモン戦争」。

ポケモンを使い、各地領土を奪い合った無残な戦争だった。

そんな戦争から約500年ほど経った今。

ポケモンを使って、チャンピオンを倒す、ペットとして可愛がる、コンテストなどに出すなどして、ポケモンが繁盛する明るい国になった。

しかし・・・

何者かの手によって突如封鎖された東京。

その中で、ポケモンを駆使し、

生き残りを賭けた勝負、通称「P・B・P」を繰り広げる人達の葛藤を描いた物語。

「P・B・Pとは」

P o c k e t m o n s t e r B a t t l e P r o g r a m
の略。

ポケモンを使い、相手と勝負する単調なシステムだが、勝負に負けたら、強制的にこの世を去るシステムになっている。

それぞれの持っている能力値、

攻撃力・防御力・特殊攻撃力・特殊防御力・素早さを徹底的に鍛え、強いポケモンへと進化する。

しかし、ポケモンによって得意不得意があるので、

それに合わせていくつかを特化するのかもしれない。

ここからポケモンのイメージを崩します

P・B・Pでは、ポケモンに武装をさせる

P o c k e t m o n s t e r A r m o r（通称：ポケアマ）

を自由に装備させ、能力を大幅に強化させ、

攻撃手段や技などのバリエーションを更に豊かにすることができ
る。

誰が作り出したシステムなのか、誰が何の目的で始めたのか。
その真相を知るものはいない。

ポケサバ 第1話「東京滅亡」

俺は今、ある危機に陥っていた。
自分のHPは6、最後の1体だ。

それなのに相手はまだ2体目、HPも満タンだ。

ここで負けたら俺は確実に死ぬ。

どうする……？

「こないなら、こちらから行くぞ。」

クソッ……、もう諦めるしかないのか……。

「――、電光石火だ。」

シュッ

「……！」

ここは……、見覚えのある天井だ……。

俺は……、死んだんじゃ……。

そうか……、夢か、夢なのか……。

「――、リン……、……、……、リン……！……、リン……

……！リン……！」

リン「……！……朝か……。」

「……大丈夫？随分うなされていたみたいだけど……。」

リン「変な夢を見たな……。」

「……？「夢……？まあいいわ。朝ごはん出来たから、着替えたら

さっさと来てよね。」

リン「ありがとう、姉さん。」

……そうだ、兄さんは？」

姉「相変わらずね……。」

リン「そつか・・・。」

兄が相変わらずというのは、朝早く起きてはポケモン構い、朝食をちやちやと食べ終わるとまたポケモン構う。

周りからポケモンオタクと呼ばれる程のポケモン好きだ。

部屋の中もポケモングッズやボールだらけだけど・・・。

ただ、強力に育てているらしく、何度か世界チャンピオンになった事があるとか。

すごいよな・・・。

ちなみに俺もポケモンは大好き、高校1年。

まあ兄さんほど強くないけどな。

・・・ということで、俺はとりあえず着替えを済ませ、階段を駆け下りた。

姉「急ぎなさいよ。今日から新学期でしょう。」

リン「ああ、そうだった。

・・・ってことはそういう姉さんだってそうなんじゃない？」

姉「あたしは家の仕事とかいろいろあってアンタよりも忙しいのよ。

ア・ン・タ・よ・り・も！！」

リン「はいはい。・・・兄さん、そろそろ学校じゃない？」

兄「ああ、そうだな・・・。うあッ！！そうだったあ！！！」

のんきにポケモンやってる場合じゃねー！！

行くぞ、ボーマンダ！！

やべー！遅刻するー！！怒られるー！！！！

うわあああああ・・・！！！！！！」

ダダダダダダダダダダ・・・

リン「・・・。兄さんらしいね。」

姉「・・・うん。あたしよりも忙しそう。

そんなことよりさっさとご飯食べて、学校行きなさいよ。」

リン「はい。」

朝食を済ませた俺は、「いってきーす。」と声をかけ、

学校まで自転車でブツ放す。

俺が通う高校は、ポケモンの育成や、戦闘の基礎から応用まで、その他諸々ポケモンを中心に活動している学校だ。と、説明してるうちに学校に着いた。

今日から新学期。朝休みのざわめく教室のドアを開けた。

ガラガラガラガラ・・・

リン「おはよう。」

カゲト「よー、リン！」

リン「お、カゲトおはよー。」

カゲト「あのさ、何か急で悪いんだけど・・・。」

リン「何だよ改まっちゃって・・・で、なに？」

カゲト「今日遊べる？帰り早いじゃん。」

リン「・・・何だ、そんなことか。いいよ。」

カゲト「実はさ、ものすごく面白いつて噂のゲームを見つけたんだよ。」

いそこから進められたんだ。」

リン「へー、どんなヤツ？」

カゲト「自分の持つてるポケモンを使って遊ぶんだけど・・・。」

リン「えー、ポケモンがかわいそうじゃん。」

カゲト「それがさ、ポケモンにHPが追加されて、

HPが0になると、そのポケモンが一時的に気絶して、

しばらくしたら元に戻るっていう。」

リン「痛みとかは？」

カゲト「軽減はしてあるけど、一応痛みはあるらしいよ。

でも決して死んだりしないから大丈夫だって。」

リン「へー。」

カゲト「ほいでさ、一番のミソはさ、ポケモンに武装できるってとこなんだよ！」

リン「へー武装・・・。はあ！？」

カゲト「何でもいいから今日買いに行こうぜ。」

リン「悪かないけど・・・。やってみるか。」

（授業中）

リン「じゃあ、その「P・B・P」とやらを買いに行くか。」
カゲト「いこーぜ。」

二人は後に待ち受ける悲劇を知らず、
ただ、興味本意で東京を破滅に導くのであった・・・。

ポケサバ 第2話「滅亡遊戯開始宣言」

カゲトと一緒に、P・B・Pとやらを買いに行った俺達。

カゲト「すいませーん、P・B・P ってますか？」

店員「P・B・P・・・ あ、こちらでしょうか？」

店の人は、そういうと某ゲーム機（画面が二つあるやつ）の箱と同じくらいの大きさの箱を取り出した。

カゲト「ああ、これです。2つ・・・ありますか？」

店員「あー・・・、すいません。今日これで最後なんです・・・。

明後日とか、もう少し後とかに入荷するらしいんですが・・・。
」

カゲト「そう、ですか・・・。 どうする？」

リン「いいよ。俺一人で買いに来るから。」

先、買ってよ。」

カゲト「・・・でも、リン・・・いいの？」

リン「おお、もちろん。」

カゲト「じゃあ、それ下さい。」

店員「お一つで、よろしいですか？」

カゲト「はい。」

店員「それでは・・・、5090円になります。」

カゲト「う・・・、財布に響くなあ・・・。」

シュツ（お札を取り出す音）ジャラジャラ・・・（小銭を取り出す音）

カゲト「あ、十円足りない・・・。」

ジャラ（小銭を取り出す音）

リンは十円玉を取り出し、カゲトに差し出した。

リン「はい。」

カゲト「え？いいの？」

リン「おお、もちろん。」

カゲト「なんか・・・、悪いね。」

リン「ゼーんぜん。」

カゲト「さんきゅ。はい。」

店員「5090円、丁度お預かり致します。」

カゲト「ありがとうございます。」

リン「よかったな。」

カゲト「なんか・・・、悪いね。」

リン「それさつきも聞いた。」

ハハハハ・・・

くカゲト宅く

カゲト「さーって、早速開けてみるかあー!!」

パサツ（箱をry）

カゲト「おお・・・。」

中には、携帯電話のような形をした機械が入っていた。

カゲト「えーと・・・これをこうしてこうやって・・・。

真ん中のフィールドボタン・・・これが。」

シュイン

カゲト「おお・・・。・・・あれ？さつきも言ったか？

まいいか。

これで・・・ポケモンを・・・。

行け！ランクルス！」

てれれれれれ（HP展開の音）

カゲト「す、すっげえ!!」

くリン宅く

リン「あゝ、P・B・Pほしくな〜。」

「え〜？あんたまだ持ってないの？」

リン「姉さん？もう買ったの？っていうか、帰ってたの？」

ユウ「帰り際にアンタを見て、あゝ、かわいそゝ。とか思っちゃったりしてゝ。」

リン「最後の一個だったって知ってたの？」

ユウ「友達の皆で買いに行ったら丁度人数分＋1個だったからねゝ。」

リン「あゝ、そっか。」

ユウ「でも、アタシの予想は当たってたっばいね。」

リン「何が？」

ユウ「だって、あんたお人よしだから絶対他人に譲るだろうなって。」

リン「なんか、いけないだ？」

ユウ「へ・・・？ え、いやあ、リンが良きや良いと思うけど？」

リン「でしょ？」

「じゃー、早速見せてよ。」

ユウ「・・・え？あ、いや、あたし忙しいし・・・、また、今度ね

！うん、今度！！」

タタタタタ・・・

ユウは駆け足でこの場を去った。

リン「姉ちゃんどうしたんだろ。」

（翌日）

今日は土曜日だから、ポケモンと一緒に遊んでようかなゝ・・・。

なーんて思っていたら、ある日、小包と一通の手紙が届いた。

リン「ふあゝあ・・・ん？」

リンは小包を手に取り

裏面を見てみた。

「桜庭 凜 様・桜庭 悠 様」

リン「なんだろ・・・？ 姉さん。」

ユウ「何よ・・・、こんな朝早くから・・・あれ？なにそれ。」

リン「わかんね。でも、俺ら宛てっばいよ。」

ユウ「ふーん・・・、ちよっとかして。」

パシッ

リン「ああ。」

ベリベリベリ・・・

ユウ「どれどれ・・・って、P・B・P!?!なんで!?!うにゃんずうえい!?!」

リン「え?」

俺が覗くと、P・B・P黒、ピンクの二色が入っていた。

リン「やった、P・B・Pじゃん!・・・でも、何で?」

ユウ「あたしも頼んでないよ・・・?」

リン「手紙読めば、何かわかるんじゃない?」

ユウ「そうね。読んでみる?」

リン「でしよ。」

ぺら・・・(か m r y)

「これより、東京を封鎖する。

直ちにP・B・Pを所持し、指定場所へ集合。

指示に従わないものは排除する。」

雷門前で待っている。」

ユウ「・・・は?」

リン「どういうこと?」

ユウ「まあ・・・、どうせ誰かのいたずらでしょうね・・・。」

最近こういう悪質ないたずらが増えてるって言っし・・・。」

リン「俺、行ってみようかな・・・。」

ユウ「・・・今、なんて?」

リン「俺、行くわ。」

ユウ「よしなさい。ロクなことないから。」

リン「姉さん、連れてってよ。免許持ってるでしょ?」

ユウ「アタシはやーよ。」

リン「・・・いいし。自転車チャリで行くし。」

ユウ「勝手にして。」

リンは、言われた通りP・B・Pを持って、自転車で五分程度の雷門まで行った。

リン「着いたぞ。」

にしても・・・、ここで何があるんだ？」

色々ほざいていたら、カゲトが来た。

カゲト「おい、リン！」

リン「あれ？カゲト。何で？」

カゲト「それがさー、こんな手紙が・・・。」

見せてもらうと、リンの家にも来た手紙だった。

リン「これって・・・、俺んところにも・・・。」

ヴン・・・

ソラ「よーリンー!!」

リン「・・・兄さん！？ 兄さんまで・・・。」

「おおーっすー!!リン、おひさー!!」

「久しぶり？昨日あったばっかじゃないか。」

「よう、リンー!!」

リン「サナエ・・・、ナオ、それに、ツルギまで？」

「頼むから僕を忘れないでよ・・・。」

リン「ああ、ごめん、シノブ。」

それにしても・・・、皆、ここに呼ばれたの・・・？」

サナエ「そう・・・、この手紙でね・・・。」

ヴン・・・

すると、何も無いはずの空中に、モニタ画面が映し出された。

そこには、黒い服、マスク、サングラスをつけた男がいた。

「???」ようこそ、皆さん。・・・選ばれし者よ。」

リン「選ばれし者・・・？」

ナオ「意味がわかんない。」

「???」フッフ・・・。無理も無い。」

・・・まあ、時期に分かるだろう。」

サナエ「今すぐ教えなさいよ。」

????「まあ待て、そう急くな。」

お前等は、P・B・Pを使い、この東京を・・・

あーもーめんどくせー！

とにかく、あんたらはP・B・Pを使って

俺が今から送る死神どもを相手に戦えばいいんだよ！！

じゃな。」

ブツ

音と共に、モニタも消えた。

リン「なんなんだ・・・？」

「随分と無責任な死神ね。」

リン「姉さん？」

ユウ「そういうことね・・・。なんで、P・B・Pがあたしらに見えないか分かったわ。」

リン「どういうこと？友達の買いに行っただんじゃ・・・。」

ヴン・・・

????「そうそう、言い忘れ。」

これより、「滅亡のゲーム」を開催する！！」
ブツ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4927r/>

Pocket Survivor

2011年10月8日20時31分発行